

畜産センター だより

肉用牛増産に向けた新たな取り組み

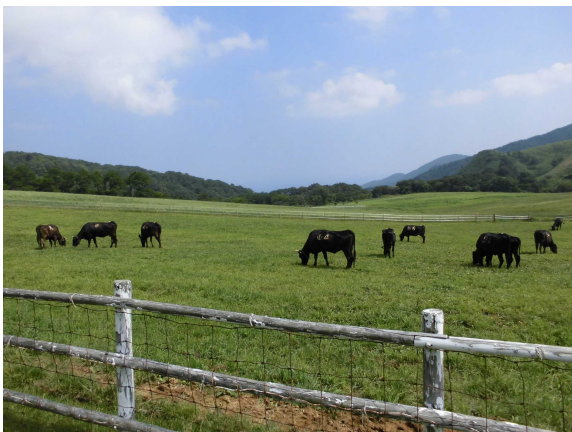
碓高原牧場長 東井 滋能

平成28年4月の人事異動で碓高原牧場長を拝命いたしました。府内の肉用牛発展のために精一杯頑張りたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

碓高原牧場では、「和牛振興基地をめざした牧場づくり」と「府民に親しまれる憩いの牧場づくり」を運営目標に優良牛及び受精卵の生産供給、家畜とのふれあいや体験学習の場の提供などに取り組んでいます。

米国の次期大統領が決まり、TPPの先行きが不透明ですが、いずれにせよ輸入牛肉の影響を受けにくい高品質な府内産牛肉の生産は重要で、京都府ではTPPと近年の和牛子牛価格高騰対策に取り組むこととし、碓高原牧場を中心に本年度から肉用牛増産に向けた2つの新たな大きな取り組みを開始しました。

新たな取り組みの詳細は本紙6ページで紹介していますが、取り組みの1つは繁殖雌牛預託事業で、和牛繁殖農家の長期不受胎牛を預かり、リフレッシュ放牧や繁殖技術を駆使



預かり牛のリフレッシュ放牧



ヒツジ、ヤギを連れて小学校訪問

平成29年2月
第15号

京都府農林水産技術センター
畜産センター

〒623-0221 綾部市位田町檜前

電話:0773-47-0301

fax :0773-48-0722

MAIL:ngc-chikusan@pref.kyoto.lg.jp

URL:http://www.pref.kyoto.jp/chikken/

碓高原牧場

〒627-0248 京丹後市丹後町碓1

電話:0772-76-1121

fax :0772-76-1123

業務部から

農家採胚で効率的な子牛生産を！

突然ですが、「農家採胚」を利用されたことはありますか？

京都府が行っている「農家採胚事業」は、当センターが所有する「バイオカウライナー」(平成4年導入)で、府内の酪農家や和牛繁殖農家に出向き、農家の優秀な牛(ドナー)から受精卵を採取し、その農家や地域の農家で、受精卵を採取した牛と同じ発情に同期化した借り腹牛(レシピエント)に、その受精卵を移植するまでの一連の受精卵移植技術を活用した取り組みです。

平成27年度は30回、7戸の農家に出向き、和牛23頭、乳牛7頭から受精卵を採取しました。その場で採取した新鮮な受精卵は、和牛1頭、乳牛57頭、F1牛21頭の計79頭に移植、39頭が受胎し、受胎率は49.7%でした。

農家採胚の目的は、改良と増頭で、性判別精液を使った採胚に取り組む農家も増えてきています。

例えば、レシピエントが乳牛の場合でも和牛の子牛を分娩させることが可能です。酪農家はその母牛からミルクを生産することができ、生まれた和牛子牛は受精卵を採取した和牛繁殖農家に譲渡されます。

このように、農家個々の目的に応じて対応させていただきますので、少しでも興味をお持ちであれば是非、ご利用ください。お待ちしております。(業務部 林)



酪農体験学習

当センターは酪農教育ファーム認証を受け、酪農体験学習など食育活動を展開しています。今年度は幼稚園・保育園の園児から大学生まで9組170名を受け入れました。

園児には、子牛に触れてもらったり、搾乳をしてもらい牛やお乳の温かさを肌で感じてもらいます。牛を覗て泣き出す園児もそのうち子牛を撫でることができるようになります。中学生は職場体験学習の一環で、除糞、飼料給与、搾乳、子牛のほ乳、牛の手入れなどの労働体験とアイスクリームとバターを作る加工体験をしてもらいます。高校生には、職場体験学習に併せて京都府の畜産の概要についての講義も行い、畜産の理解をより深めてもらっています。中学生も高校生も初めて牛に触れる生徒がほとんどで、最初は大きな牛に戸惑っていますが、700kgを超える牛をロープ1本で引くことが出来る生徒もいます。

このように、子牛とのふれあいやエサやりなどの管理作業、乳製品加工体験を通じて、畜産業に興味を持ってもらうきっかけ作りに努めています。

今年度は、小中学校の教員を目指す教育大学の学生を初めて招き、「教員の立場から生徒に伝えて欲しいこと」をテーマにカリキュラムを組んで、乳牛が生後約2年で出産して乳を出す過程を学んでもらった後、出産の立会や搾乳、子牛のほ乳などを体験してもらいました。学生からは、「人工授精や出産シーンは、講義では絶対に得られないリアルで貴重な体験だった」、「命の大切さや命をいただくことの大切さを今後の学校教育に活かしていきたい」などの感想や決意が聞かれました。

乳牛を飼養する当センターだからできる体験学習やふれあいの機会を、今後も積極的に提供していきます。(業務部 藤野)



園児が搾乳体験



出産に立会い、子牛の前足を引き分娩介助する大学生

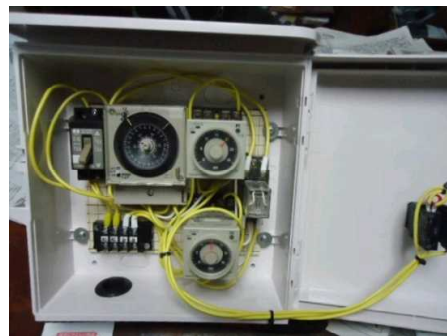
研究・支援部から

家畜用水の殺菌装置を開発しました

家畜の飲用水についても、上水道と同様に殺菌をすることは、水を介した疾病を防ぐために重要なことです。当センターでは平成25年度～平成27年度に、家畜に給水するためのろ過装置と殺菌装置の開発をおこない、今年から設置に向けた取り組みを始めています。殺菌装置は市販品も多くありますが、畜産農場では、原水をくみ上げた後、一時的に貯水することが多いので、貯水タンクの段階で殺菌することとし、常圧下で殺菌剤が定量滴下するタイプの殺菌装置を開発しました。殺菌装置は殺菌剤添加装置と制御盤、それに薬液タンクの3つで構成され、貯留槽またはその前段階で殺菌剤を滴下するよう配置します。制御盤には3つのタイマーが有り、それぞれのタイマーが家畜の活動時間帯と殺菌剤の滴下時間、滴下時間間隔を制御します。なお、沢水等が原水になっている場合には、殺菌装置の前段階でろ過施設の設置をお勧めしています。設置にあたっては、要望を当センターまでお寄せください。(業務部 安富)



殺菌剤添加装置と制御盤



制御盤内部（3つのタイマー）

農場の入口に設置する自動式車両消毒装置

畜産農場の防疫において、人の消毒とともに重要なのが農場に出入りする畜産関係車両の消毒です。出入車両を確実かつ均質に消毒するためには消毒ゲートを備えた自動式の車両消毒装置の設置が有効ですが、市販の装置は安いものでも200万円で、かつ大がかりな設置工事が必要という課題がありました。そこで畜産センターではコストをかけずに導入できる、安価かつ実用的な自動式車両消毒装置を開発しました。

この装置は、車両を自動検知するための光電センサー、消毒液タンクと加圧用ポンプ、そして消毒液を噴射する消毒ゲートで構成され、消毒ゲートには、車両側面に加え手作業では消毒が難しい車両底面にも消毒液を散布できるよう計10カ所の噴射口を設置しています。ゲートはローリー車やダンプ等の大型車両でも通行できるように十分な幅と強度を持たせています。電源は100ボルトなので、家庭用コンセントや小型発電機で動かすこと

ができ、分解・組立も容易なので設置場所を選びません。

装置単体の資材費は10万円程度で、出入口への常設用に舗装や排水設備を設ける場合でも総額20万円程度の費用で導入することができます。

現在、畜産センターではこの装置を展示し、普及活動を行うとともに、導入農家での自作や地元業者発注ができるように施工・設置方法のマニュアル化を進めています。ご興味を持たれた方はお気軽にご相談ください。

(研究支援部 河村)



(左) 消毒装置全容、(右) 消毒の様子

稲発酵粗飼料（稲WCS）の生産が急増しています。

稲発酵粗飼料（稲WCS：稲ホルクロップサイレージ）は、稲の子実と茎葉を刈り取り、ロール状に梱包した後、ラッピングしてサイレージ調製し、牛の飼料として利用するものです。

府内の栽培面積は、平成26年度は53haでしたが、JAが専用大型機械を導入したことにより酪農を中心に急増し、平成28年には108haとなっています。

畜産センターでは、農業改良普及センターやJAと協力して、稲の生育状況やほ場状況の確認を行っています。特に、高品質の稲WCS生産に重要な適期（糊熟期から黄熟期）刈り取りと大型機械がスムーズに作業できるよう出穂期での落水について重点的に助言しました。

また、高糖分で消化性に優れる稲WCS専用品種「たちすずか」の実証ほを設置し、現地で栽培利用研修会を実施するなど普及に努めています。

酪農家からは高品質な稲WCSへの要望が強く、今後とも消化性と蛋白質含量の向上等の取り組みを支援していく予定です。（研究・支援部 荻野）



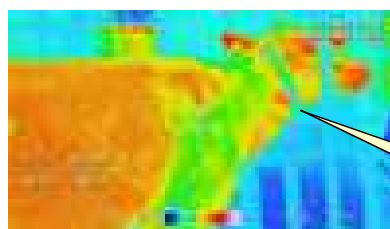
研修会の様子

家畜用衣料で乳牛の夏バテ防止！

暑さに弱い乳牛は、夏になると食欲が落ち、乳量が少なくなります。近年の猛暑には既存の対策だけでは対応しきれず、猛暑日が続いた平成22年の夏季には府内の乳牛死亡頭数が前年の2倍となりました。

そこで、新たな暑熱対策としてヒト用の触るとひんやりする冷感素材に加水装置を付けた牛専用の夏バテ防止衣料を綾部市のゲンゼ株式会社と共同で開発しました。

家畜用衣料は、牛の首から胸を覆う形状で、さらに加水装置で冷感素材を湿らせ、気化熱を効率よく利用して脳に行く血液を冷やすものです。気化熱で体表面の温度が下がることをサーモグラフィで確認しました（写真）。送風と組み合わせることで、さらに冷却効果が高まることが期待できます。



←家畜用衣料脱着直後のサーモグラフィ画像

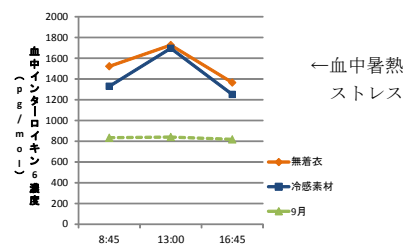
体表面温度を5℃程度冷却

また、インターロイキン（暑熱ストレス指標とされる成分）の血中濃度を調べたところ、家畜用衣料の着用により朝と夕の濃度が低くなったことから、体表面温度が下がることで、翌朝への暑熱ストレスの持ち越しが緩和されたと推測できました。この家畜用衣料を猛暑時に泌乳最盛期を迎える牛や、分娩直後の牛に着用して夏場の体力消耗を抑えたいです。

平成28年度は中丹地域2戸の酪農家に試着していただいたところ、耐久性と加水装置の精度を向上してほしいという意見をいただきました。今後も酪農家の声を聞きながら改良を重ねて普及を目指します。（研究支援部 岩崎）



↑家畜用衣料着用中の牛



どっさり捕れます、ヌカカトラップ

鶏のロイコチトブーン症の原因原虫を媒介するヌカカを集めて捕らえる自立型のヌカカトラップを開発しました。装置はヌカカをUV蛍光管で誘引し、蛍光管の近くに来た虫を有圧換気扇で吸い込み防虫網で作ったバックで捕らえる構造になっています。装置は、写真のように鶏舎の周辺の空き地に置いて、夏季の夜間に運転し、昼間は蓋をしてスイッチを切っておきます。製作に当たっては、ご相談ください。(研究・支援部 西井)



雨よけに透明なアクリル板を使用することで広範囲にヌカカが誘引できます

府内養鶏場でヌカカトラップ設置

ヌカカトラップの仕様

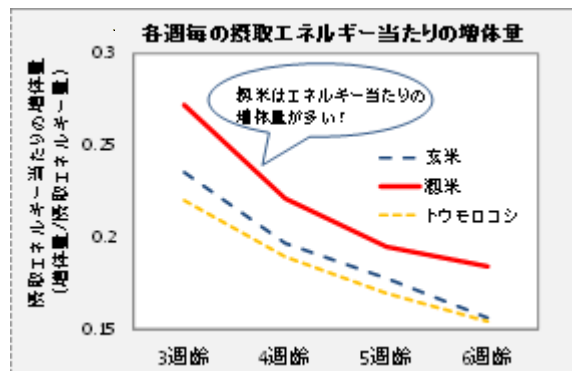
UV蛍光管	10W、1本
有圧換気扇	羽径25cm、25W
トラップバック	農業用防虫網、開目0.3mm
作成金額	約2万円

粳米はブロイラーの飼料利用性を向上させます

粳米を60%以上配合した飼料をブロイラーに給与すると、筋胃の活動が促進されて、筋胃内でのpHが安定し、カンピロバクターの定着が抑制されることを確認しており、現在、その実用化に向けた研究を行っています。この研究を行う中で、粳米の飼料としての栄養価を測定したところ、粳米はブロイラーの飼料利用性も向上させることが判りました。粳米を60%配合した飼料は、トウモロコシや玄米を主体にした飼料に比べて、エネルギーが18%も低いのに、粳米を給与した鶏の増体はそれらの飼料を上回る成績をあげています(右グラフ)。これは、粳穀の効果によるのではないかと考えています。粳米の約20%は粳穀ですが、その粳穀をブロイラーが摂取することによって、消化管の活動が活発になって、胃液や消化酵素の分泌量が増え、消化物との接触が増えて、でんぷんやたんぱく質の消化率が上がることによるものではないかと考えています。(研究・支援部 西井)



ブロイラーをケージで飼育し、詳細なデータ採取分析しています。



築いていこう差別のない明るい社会

碓高原牧場から

京都マニュアル子牛の認定状況と枝肉成績について

全国農業協同組合連合会京都府本部（JA全農京都）は、購買者に喜ばれる子牛作りを進めるため、飼料給与や管理方法を定めた「京都産和牛子牛飼養管理マニュアル」に基づいて育成され、中丹子牛せり市上場時に測定した体高、胸囲、腹囲等が認定基準値を超える子牛を「京都マニュアル子牛」に認定しています。

表1 京都マニュアル子牛認定頭数と平均取引価格

（去勢・雌込み、税抜）

	認定牛			非認定牛	
	頭数	認定率	取引価格	頭数	取引価格
前回調査	123頭	8.1%	517,211円	1,387頭	438,234円
今回	104頭	9.9%	663,587円	947頭	601,712円
総数	227頭	8.9%	584,273円	2,334頭	504,563円

（参考）前回は平成23年11月市から平成26年6月市までの1,510頭を調査

今回は平成26年9月市から平成28年6月市までの1,051頭を調査

平成23年度の認定開始以来、これまでに227頭（平成28年6月市時点）がマニュアル子牛に認定され、その認定率は前回調査と比較して1.8ポイント上昇しました。

認定子牛全頭の平均取引価格（去勢雌込、税抜）は非認定子牛と比べ約8万円の高値で取引され（表1）、また認定子牛を追跡調査したところ、枝肉成績が判明している38頭は十分な枝肉重量であるとともに、4等級以上の割合が京都市第二市場の平均70%（平成26年度）を大きく上回り質・量ともに優れた肥育成績で、マニュアルの効果や認定子牛の優秀性を裏付けるものでした（表2）。今後は、認定率の向上に繋がる飼養管理指導や情報発信に努めます。

（碓高原牧場 岩田）

表2 京都マニュアル子牛認定牛の肥育成績

（平均±標準偏差）

性	頭数 (頭)	出荷月齢 (月)	枝肉重量 (kg)	ロース芯面積 (cm ²)	BMS	格付			
						5等級	4等級	3等級以下	4等級以上
去勢	25	29.5±1.6	560.9±54.5	63.4±7.2	7.2±2.0	14頭	8頭	3頭	88.0%
雌	13	30.6±1.9	511.8±52.2	63.8±10.6	7.6±2.6	8頭	3頭	2頭	84.6%

京都ビーフ生産拡大事業について

碓高原牧場では、今年度から高品質な和牛子牛の増産を目的に「京都ビーフ生産拡大事業」として2つの新規事業に取り組んでいます。

① 繁殖雌牛預託事業

繁殖和牛農家の悩みの種となっている長期不受胎牛を当场で預かり、放牧場でのリフレッシュやパドックでの運動、高度な繁殖診療技術を駆使することにより受胎させ、農家にお返しします。

今年5月から府内各地の繁殖牛33頭の預託を受け入れてきました。平成29年1月末現在、22頭の受胎が確認され、受胎牛は随時農家に返却をしています。

預託期間は11月末までとなっていますが、1頭でも多く受胎させてお返しできるように、鋭意努めています。

② 交雑種（F1）を活用した和牛子牛増産

和牛とホルスタイン種の交配による交雑種（F1）は和牛雌牛と比べ大型で哺育能力が高い

ことから2卵移植による双子生産も可能であるなど、受卵牛としての資質に優れています。

本年4月及び6月に7～9か月齢のF1を20頭、岡山県から導入し現在育成中です。

9月から和牛受精卵の移植を進めており、来年誕生する子牛は、農家の皆さんに順次譲渡する予定です。（碓高原牧場 山内）



放牧中の預託牛

交雑種（F1）雌牛利用和牛子牛増産モデル事業の実績について

碓高原牧場では平成24年度からJA全農京都と協働し、これまで受卵牛としてはあまり利用されなかったF1雌牛を活用した和牛子牛増産に取り組んできました。

事業の仕組みは、当场がJA全農京都からF1を導入し、当场で採取した優良な血統の和牛受精卵を移植、受胎後JA全農京都を通じてF1を和牛繁殖農家に譲渡します。譲渡牛は繁殖農家で分娩、子牛が離乳したらそのF1をJA全農京都から再び当场が導入し受精卵移植を実施します。

3産を本事業の終期とし、これまでに10頭のF1の導入と譲渡を繰り返し、24頭の和牛子牛が生産されました。子牛の中には、府内で肥育され京都肉牛枝肉共進会で京都市長賞を獲得したものもあり、受精卵移植による優良牛増産の成果も現れています。

この事業をF1を利用した京都ビーフ生産拡大事業へと発展させ、今後は同時に2つの受精卵を移植して双子生産を試みるなど、より多くの和牛子牛を生産する取り組みを行うこととします。（碓高原牧場 田中）



レンタヤギが好評です

碓高原牧場では、遊休地・耕作放棄地の発生防止や解消の手段として、平成14年度から、牛やヤギのレンタルを行っています。

貸出期間は4月1日から11月30日まで、貸出料はヤギが1日1頭当たり11円、牛が1日1頭当たり72円で、ヤギの場合は簡易な放牧器具の貸出しも行っています。貸出申請を受ければ現地を確認し、併せて飼育方法や放牧方法なども指導します。

今年度のレンタヤギの実績としては、丹後3件、中丹1件、南丹1件の計5件で、7頭の貸出を行いました。

その中でも、綾部市の「里山ねっと・あやべ」にお貸しした際は地域の方々からの関心も高く、9月4日に地域の方を交えヤギに関する講習会を開かせていただきました。

また、宮津市の「由良の戸千軒長者の館」にお貸しした際は、除草対策のみでなく丹後由良駅のマスコットとして地域の方や駅の利用者の方にも大変かわいがっていただき、地域の方から感謝の声をいただきました。

例年同様、山羊の頭数に限りがあり、本年度もすべての希望者の方にヤギをお貸しすることができませんでした。今後としては、多くの希望者の方にお貸しできるように飼養頭数を増やし、できるだけ多くの御希望に対応できるように進めていきたいと考えています。

（碓高原牧場 辻）



宮津市由良



綾部市下替地町

京のこだわり畜産物生産農場登録農場を訪ねて

～ 酪農 ～ 木津川市 農事組合法人 クローバー牧場

木津川市加茂町のクローバー牧場で生産される牛乳は、「特別牛乳」として販売されています。特別牛乳の製造許可を受けている牧場等は現在、全国に4カ所しかなく、京都府の「京のこだわり畜産物生産農場」にも登録されています。特別牛乳は一般の牛乳と何が違うのでしょうか。特別牛乳は、その成分規格として、無脂乳固形分が8.5%以上（一般牛乳は8.0%以上）、乳脂肪分が3.3%以上（同3.0%以上）でなければならず、1mlあたりの細菌数も3万以下（同5万以下）に抑えられたものです。また、特別牛乳として処理するための設備や、牛舎の構造から糞尿処理施設に至るまで、法律で決められた基準を守る必要があります。

そのような特別な牛乳を作り続けるためには、まずは牛づくりが大事とのこと。基準を満たす高品質の乳を出す牛を揃えなければなりません。つつい目が行きがちな「乳量」ではなく、「乳質」にこだわって改良を重ね、現在の牛群ができあがったそうです。そして、

病気をさせず、乳質を維持させるよう分娩前後の管理や搾乳衛生に気を配ります。牧場ではさらに、牛の飲み水や夏場の細霧にマイナスイオン水を使用しているそうです。このような努力により生産される特別牛乳。牛乳がいらいのお子さんが、クローバー牧場の牛乳なら飲めるようになったという話もお聞きしました。実際に試飲すると、濃い味がするのになら後味が残らず、さっぱりした口当たりでした。最近では、新商品として特別牛乳を70%含んだアイスクリームの販売を始めたとのこと。牧場主松本さんのこだわりがたくさん詰まった牛乳と乳製品は、まだまだ進化し続けています。

（業務部 牛島）



～ 肉用牛 ～ 有限会社あつぷるふぁーむ

今回は与謝野町の有限会社あつぷるふぁーむを訪ねました。あつぷるふぁーむは昭和60年に山本雅巳社長らが設立し、最初は畑のみだった状態から少しずつ拡大、現在では53haの広大な農場に水稻、ハウス野菜、りんごなどを育てています。その一角で飼育している繁殖和牛は、1頭から徐々に頭数を増加し、2回の牛舎の移転を経て、現在では繁殖雌牛6頭、子牛3頭を飼育しています。

特徴的なのが、牛舎では電灯を使わず季節の明暗のリズムの中で牛を飼育し、牛舎の周りの放牧地で自由に過ごさせ、良質な牧草をふんだんに用意し好きなペースで食べられるようにするなど、牛たちが自然に近い状態で過ごせるよう飼育されていることです。このこだわりが評価され、平成28年4月には「京のこだわり畜産物生産農場」にも登録され、「牛と人、両方にゆとりがあるような飼育を目指

している」とおっしゃっていたのが大変印象的でした。

また、地域振興にも力を入れており、中学生の職場体験の受け入れや、道の駅のイベントでの牛の展示、肥育した牛を地域の「まちグルメ」というイベントに提供するなど精力的に活動をされています。

「飼育頭数を増やすのは難しいが、地域の中での回転をよりうまくいくように、イベントに合わせて飼育するなどしてさらに活用してもらいたい。」と意欲を見せておられました。



山本雅巳社長

（碓高原牧場 岩田）

～ 採卵鶏 ～ 福知山市 有限会社グリーンファームソーゴ

京都大江山の麓にあるグリーンファームソーゴは、採卵鶏を約18万羽飼養されており、卵は毎日農場付属のGPセンターで洗卵・パック詰めし、全量を自社販売されています。

通常の卵のほか、餌にこだわり、調理時に黄身の色が鮮やかに濃くでる特徴を持った2種のブランド卵を、京都を中心に北近畿や東京でも販売されています。また昨年からは香港などへの輸出も開始されました。

農場では20数年前より、卵の安心安全と品質向上のため、食品衛生管理のHACCPの考えを取り入れ、農場の衛生管理にも力を注いでこられました。そして、5年前に開始された、農林水産省の農場HACCP推進農場の指定を京都府で初めて受けられました。長年「消費者に安心安全で良い卵を届けたい。」と農場内で続けられてきた事が、消費者にも見える形になってきました。

平成26年11月には「京のこだわり畜産物生

産農場」に登録され、現在、次のステップ「HACCP認証農場」の指定を目指して、職員一丸となって頑張っているとのこと。

今後も特徴のある、また品質の高い鶏卵生産を期待しております。(研究・支援部 上羽)



阿部社長（左）と綱島農場長

～ 肉用鶏 ～ 南丹市 有限会社栄光食鳥

今回は有限会社栄光食鳥の須知猛さんを訪ねました。

平成8年にお父さんから養鶏場を受け継ぐと同時に、現在の会社を設立され、今年で20年という節目を迎えられました。6名の従業員とともに、「ハーモニーチキン」と「都地どり」の2種のブランド鶏を約2万羽飼養し、自宅では稲作にも取り組んでおられます。

栄光食鳥はアンモニア濃度測定の実施や音楽を聴かせ鶏のストレスを軽減していることを特色として「京のこだわり畜産物生産農場」に登録されています。換気の基準など自分の感覚で判断せず、測定値を基準にすることで従業員間の差がなく、一定した管理ができるようにしているとのこと。

先輩からの「裸足になって歩いてみて、糞がついて気持ち悪いと思う。そのような環境では良い鶏は育たない。」という教えを受け継がれ、鶏の目線にたって管理するという心を心がけておられます。飼育羽数を減らして、全体に目が行き届くようになってから、死亡

鶏が減ったとのことでした。

また、養鶏場で出た鶏糞を肥料として水田に散布し、飼料用米を生産し鶏の飼料とする循環型農業をされています。今後は地域ぐるみで循環型農業を行い、さらに発展させたいと熱く語られます。

養鶏をやりたいという人を一人でも増やすことが使命だと思っているとのこと、京都の養鶏を盛り上げられるよう、今後も頑張っていたきたいと思えます。

(研究・支援部 中野)



～ 養豚 ～ 有限会社日吉ファーム

今回は、南丹市日吉町にある日吉ファームを訪問しました。社長の北側勉さんは大阪の実家が養豚業を営んでいたのがきっかけで養豚に携わるようになり、昭和49年に現在地に移転し、昭和56年には有限会社日吉ファームを設立されました。当初は肥育豚のみでしたが一貫経営に切り替え、現在は繁殖豚600頭規模で経営されています。平成7年には肥育農場である質美分場も開設されました。

平成13年に4戸の養豚農家で丹波高原飼料組合（京丹波町）設立し、パンなどのエコフィードを主流にした低コストで高品質なリサイクル飼料を生産・給与しておられます。

農場内における車両消毒、豚の飲水消毒にも取り組まれているほか、ゆったりとした飼養密度で、ふん尿を滞留させない工夫をするなど、衛生管理と畜産環境にも気を使われています。このようにしてこだわってきた飼いが「京のこだわり畜産物生産農場」に認められたことで改めて自信を持てたと、語られました。

平成25・26年には2年連続で西日本枝肉コンクールにおいて農林水産大臣賞を受賞されるなど、その肉質は業界から非常に高く評価されています。平成27年4月には「丹後王国食のみやこ」にバーベキューレストラン「トン'Sキッチン」を開店され、「優秀な種豚にリサイクル飼料により甘み加わった、より美味しい豚肉をお届けしています」とおっしゃっていました。

丹精込めて育てられた日吉ファームの美味しい豚肉を、是非一度ご賞味下さい。

(研究・支援部 中川)



畜産センターだより第15号 目次

■ 巻頭言 P 1

・肉用牛増産に向けた新たな取り組み

■ 業務部から P 2

・農家採胚で効率的な子牛生産を！

・酪農体験学習

■ 研究支援部から P 3～P 5

・家畜用水の殺菌装置を開発しました

・農場入口に設置する自動式車両消毒装置

・稲WC S(稲発酵粗飼料)の生産が急増しています

・家畜用衣料「うしブル®」で乳牛の夏バテ防止！

・どっさり捕れます、ヌカトラップ

・粃米はプロイラーの飼料利用性を向上させます

■ 淀高原牧場から P 6～P 7

・京都マニュアル子牛の認定状況と枝肉成績について

・京都ビーフ生産拡大事業について

・交雑種(F1)雌牛利用和牛子牛増産モデル事業の実績について

・レンタヤギが好評です

■ 京のこだわり畜産物生産農場登録農場を訪ねて P 8～P 10

・農事組合法人クローバー牧場

・有限会社あつがるふあーむ

・有限会社グリーンファームソーゴ

・有限会社栄光食鳥

・有限会社日吉ファーム

畜産センターのホームページもご覧ください

試験研究の成果やトピックス、月々の活動報告や既刊の畜産センターだよりなどをご覧いただけます。また、「京都府土づくりネットワーク」で、京都府内で生産されている家畜堆肥の成分や製造方法などを知ることができます。

<http://www.pref.kyoto.jp/chikken/>